

平成28年7月9日開催「よみがえる小西行長公」講演会 第11弾

第1部 基調講演「戦国大名正室の美しさ」質問および回答

※下記回答は、講演者である佐島顕子氏によるものであるが、一部を大浪（宇土市教育委員会文化課）が回答した。

【質問】 婚家と実家を結ぶ正室ですが、正室同士が交流するという場はなかったのでしょうか？

【回答】 あったと思われます。正室同士といっても、自分の姉妹が他家の正室であったり、夫の兄弟の正室たちとは義理の姉妹です。彼女たちそれぞれの親族とも繋がりができます。ですから親族が年中行事に集まったり、正月などに贈答品を送るだけでも、広汎なネットワークになります。手紙を交わしたり、花見や寺社参詣で他家の正室と一緒にすることもあったでしょう。

また、北政所ねねは、秀吉が全国の大名から差し出させた人質（正室や子女）を大坂で預かる役目を持っていました。人質たちが大坂の各自の屋敷で不自由なく暮らせるように気配りすること、また彼女たちの間に不穏な空気がないかどうか調べることも北政所の責任です。

自然、北政所を中心に正室たちは手紙や贈り物を交わしてコミュニケーションをとりました。北政所ねねが山内千代に「うす色の山茶花」を下さいと求めた記述もあります。北の政所主催や正室たち同士の「女子会」も行い、秀吉の天下の実情を情報交換して国元の夫や家臣たちに伝えさせ、謀叛を起こす気にならないよう監督もしたことでしょう。

【参考文献】

田端泰子『北政所おね』（ミネルヴァ書房、2007年）。同『女人政治の中世』（講談社現代新書、1996年）。

【質問】 正室は何を幸せ（心の支え）に生きていたのでしょうか？

【回答】 心の支えは今も昔も人それぞれですが、たとえば夫とのパートナーシップが良好で実家と婚家が滅びず栄えること、子どもたちが無事に育って独り立ちしていくこと、領民が安全に暮らせること、などでしょうか。

現代では「愛しているから結婚する」考え方が常識です。けれどもかつては、社会福祉も医療保険も失業保険もなく、食料も限られ医療は未発達で治安も悪く、人権感覚も未熟で理不尽なことがまかり通る時代でした。

そんな時に頼れるのは家族・親戚のネットワークだけでした。一人ぼっちでは、あっさり命を落としてしまいます。だから結婚し、子どもを育て、その子どもの結婚を通じてまたネットワークを広げて助け合って生きていました。日常生活のすぐ隣に「死」があった時代、結婚ネットワークによって助けあえる安心感。こういう「幸せ」が大事な時代もあったのです。

現代では「個人」が危なくなった時は、社会が助けてくれます。そのために税金を納め行政があり、NGOやボランティアがいます。ですから生き延びるために有利だから結婚するという考え方は薄くなりました。

「愛しているから二人で支え合いたい」気持ちを優先する恋愛結婚は、家族親戚一族の助けがなくても、社会が個人個人を支えてくれるから可能になった結婚形態です。

ただ、昔も、家族親戚にお金や力がない人は、結婚しても別に助けてもらえないので、「勝手に」好きなひとと結婚できました。

ただし、結婚するためには新居を用意し、子どもたちを養える収入が必要です。20世紀になっても戦前までは、住み込みの使用人や貧しい物売り、自分の田畑を持たない人々は、結婚して一家を構える力がないため、「ひとりぼっち」で生涯を終える場合がたくさんありました。

そういう時代では、結婚して共に生きる家族を持ち、安定した暮らしができるだけでも「幸せ」だと羨まれたことでしょう。

【質問】 結婚が嫌な場合は、断ってよかったのですか？

【回答】 どうしても嫌な場合は断ることもできたでしょう。子どもの結婚には父だけでなく母の意志も重要だったといわれています。ですから父の進める結婚が嫌な場合は母を味方につければ、縁談を打ち切ってもらうこともできたでしょう。

しかし、もし大名の息子が「戦さに出て怪我をしたり死んだりするのは嫌だ」と言えば許してもらえるかといわれると、微妙ですね。「人質になんか行きたくない」と思い詰めた細川忠興の次男興秋は、旅の途中で寺に逃げ込んで出家してしまいました。

すると、家族や家臣、家臣の家族や領民の安らぎを図るための結婚を「イヤだもん」と断った場合、彼女は家の中に居場所があるでしょうか。出家して尼になるか、病気であの世に行ってしまうぐらいでないと許されない空気を感じます。

大名の息子に生まれたからには戦場で獅子奮迅の働きをするように、大名の娘に生まれたからには家と家をつなぐマネジメントに力を注ぎ、子どもたちを一人前の「戦国人」に育てあげ、子どもの父親＝夫とパートナーシップで家を守り、夫の不在時や死後は自分が家の代表にもなりました。つまり「正室」は職業でもあるわけです。現代でも、就職する会社の内情をよく知らなくても、とりあえず入社してみることに似ていますね。

当時は離婚の多い時代でもありました。「妻が夫を離別することもある」「離婚経験は再婚の妨げにはならない」と、宣教師フロイスも日本の世相を見えています。

相手の人となりがわからない段階で結婚をただ拒否するより、とりあえず結婚してみて、どうしてもダメなら離婚して別の人と再婚する、という手もありました。

【参考文献】

松田毅一・E. ヨリッセン『フロイスの日本覚え書 日本とヨーロッパの風習の違い』（中公新書、1983年）

【質問】 戸次道雪の娘・閨千代の話詳しく知りたいのですが、どの本に載っていますか？

【回答】 吉永正春『九州戦国の女たち』（海鳥社、2010年）。山本兼一『まりしてん閨千代姫』（PHP研究所、2012年）。

【質問】 側室が生んだ男子が家を継いでも、正室の家柄がものを言うことはあるのでしょうか？

【回答】 側室が生んだ子どもの「正式な母上」は正室でした。庶子には、生母と「母上」の二人がいるわけです。

「正式な母上」の役割は、その時代に適応した一人前の人間に子どもを育てあげることでした。たとえば『源氏物語』で、明石の上が産んだ娘の入内の支度は、「母上」の紫の上が丁寧に調べています。生母明石の上は身分が低く、源氏の「妻」としても序列が低かったので、公式には母として振る舞うことができませんでした。同じように、側室に産まれた男子も、側室

は生母として可愛がり育てますが、養育・教育の責任は正室が持ちます。

正室より側室の方が身分が高かったり、正室実家と側室実家が不仲だったりすると、家庭問題が政治問題になって複雑化します。ですから夫は、だれかれかまわず好きに手をつけて側室にすることはできません。既存の側室たち、その実家同士の関係、周辺国衆のパワーバランスを見ながら、適切な位置の家の娘を側室にすることになりました。

秀吉の場合、糟糠の妻・北政所ねねが居る所に、淀君（信長の姪）を側室としたので、確かにややこしいことにはなりましたが、ねねも淀君も聡明に行動したので、「家庭」を上手に運営しました。

なぜ秀吉が淀君を側室にしたのか。「お市の方に憧れていたから」という俗説もありますが、秀吉が織田信長の後継者であることを全国に認めさせるためには、どうしても信長のDNA（血筋）が必要だったとみることができます。「出自もはっきりしない秀吉を天下人として敬え」と命じるのは、当時としても無理がありました。信長の後継者を自称するためには、信長の血統を持つ娘と結婚して「信長の嫡孫み」になる必要があったのでしょう。

徳川秀忠も、淀君の妹の江と結婚しています。豊臣も徳川も、織田信長の血統がなければ世間に認められなかったとも言えます。

秀吉は、人々が自分を内心馬鹿にしていることを熟知しています。秀吉本人は知略と大軍と富があるので自分の政権を維持できますが、自分が死んで子どもの時代になったら？

「秀吉の子」では人々があっさり見限りかねません。ここはどうしても、「信長DNA」を継ぐ子どもが「豊臣政権」の次代に欲しいところです。するとライバル徳川氏も、「信長DNA」を継ぐ家光でなければ、豊臣秀頼と対抗しきれなかったのでしょう。

「秀頼は秀吉の子ではない」という研究もありますが、当時の人々にとっては父が誰かより、「母上はまちがいなく織田家出身」で十分だったのでしょう。

【参考文献】

田端泰子『北政所おね』（ミネルヴァ書房、2007年）。福田千鶴『淀殿』（ミネルヴァ書房、2007年）

【質問】 家康の義女を正室にするために離婚することありましたが、これは何故入れ替えではいけなかったのでしょうか？

【回答】 たとえば関ヶ原の戦いの直前、家康の養女栄姫と結婚するために、黒田長政は蜂須賀正勝の娘・糸姫と離婚します。慶長15年には家康の養女国姫と結婚するために、有馬直純が小西行長の姪（洗礼名マルタ）と離婚しています。

「入れ替え」。たとえば正室の座を徳川家の姫に譲って側室に落ちたとしても、前正室して夫との絆は切らず、我が子たちのそばから離れない。

これは二重の意味で無理でした。

まず、正室は「職業」です。ファーストレディは女性家臣たち（侍女たちの中には家臣の妻たちも含まれました）に従えて、朝廷や天下人、他大名や寺社との関係を上手に結び、夫の不在中は甲冑を身につけて家中を統率することもありました。ひとつの家に「正室」「元正室」がいては混乱の元です。また、嫡子にとって母が正室から側室になると、自分も庶子になってしまいますので、兄弟間にも問題が起きます。

大名にとっても、嗣子の問題で、徳川家の娘との再婚は難題でした。すでに正室との間に生

まれた嗣子がいるのに、再婚した徳川系の正室に子どもが生まれた場合、自分の嗣子を廃して「徳川の子」を後継ぎにしなければならないのかと悩みます。徳川家から「それは気にしないでよいから」と言われることもあります。そうもいきません。徳川系の子が大人になった時に、自分の嗣子に仕える一家臣として遇するのは、やりにくいことです。

大名にとっての離婚・再婚は、どのネットワークから完全離脱して、どのネットワークに立ち位置を持つのかを内外に明らかにする、たいへん厳しい選択でもありました。

【参考文献】

山本博文『徳川将軍家の結婚』（文春新書，2005 年）。田端泰子『細川ガラシャ』（ミネルヴァ書房，2010 年）

【質問】 水軍の将・小西行長が、何故朝鮮出兵では水軍の将ではなく、第一軍の将に任じられたのか？

【回答】 小西行長は宣教師史料で「海の司令官」と呼ばれています。ですが彼は自分の水軍を養っていたわけではなく、熊野灘から瀬戸内海の水軍戦力を統合して秀吉の戦争に動員する「まとめ役」でした。もちろん室津や小豆島を支配するようになると、その海民を動員して自分の船団とし、海戦の指揮を執ることもありましたが、船団が四国に上陸すると陸戦も行いました。

その彼が天正 16 年（1588）、肥後国衆一揆で領主・佐々成政が引責切腹した後の肥後国宇土に領主として赴任します。

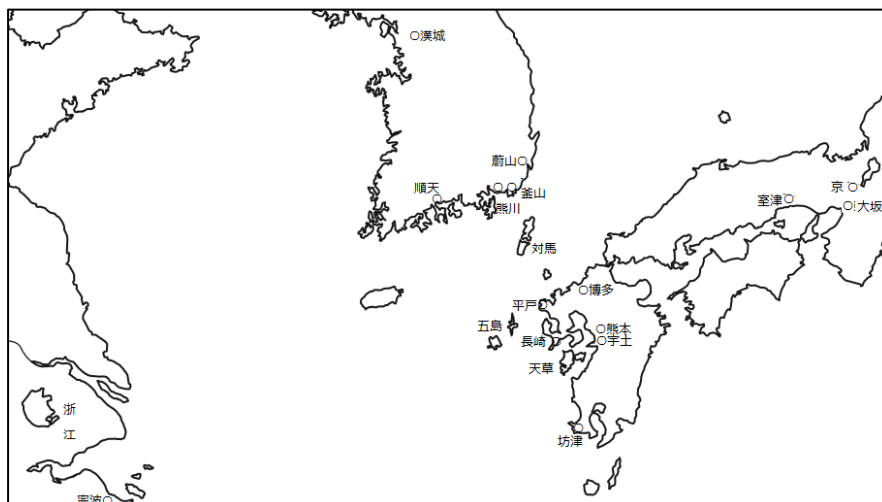
実は、下の地図をご覧くださいとわかるように、中国の商業中心地・浙江地方の船が、取引のできる港を求めて海を渡った場合、五島・平戸・長崎・島原・天草・八代・坊津など九州の西海岸のどこかに到着するものでした。ですから九州の西海岸地域は古代の鑑真（坊津）、遣唐使船（八代）、道元（熊本の河港・川尻）など、多くの人士や船が訪れたところです。

天草を守りとして位置する宇土は、その九州沿岸の中心でした。

天正 16 年に瀬戸内海から外され、外海に開いた九州に入った小西行長は、今度は五島から八代までの海民勢力（彼らを仕切る五島宇久氏、平戸松浦氏、肥前大村氏、島原有馬氏）を統率して、秀吉の戦争に参加することになります。対馬の宗氏とも連携します

それで秀吉は、朝鮮出兵では小西行長と海の大名たちをまとめて第一軍とし、最初に海を渡らせたわけです。第二軍が、小西領の後背地の領主となった加藤清正と鍋島直茂でした。

ですから小西行長は、かつて船団が四国に着くと上陸して戦ったように、朝鮮に上陸すると、戦いながらも、朝鮮国王との講和交渉のために平壤まで進むことになった次第です。



【参考文献】

佐島（国重）顕子「秀吉の国内統一過程における小西行長」（箭内健次編『鎖国日本と国際交流 上』吉川弘文館、1988年）

【質問】 天草の木山弾正の正室も夫の仇討のため、武装して戦って亡くなったのですか？

【回答】 伝説として、木山弾正の妻・お京の方の逸話が残されています。天草一揆を討つため、加藤清正は天草に兵を進めます。清正は、天草五人衆の一人で志岐城主の志岐麟泉の援軍として参加していた木山弾正正親を仏木坂で討ち取ります。これを聞いた木山弾正の妻・お京の方は、夫の敵討ちのため、夫の鎧兜を身に着け、城内の女中たちとともに清正の陣に向かいます。しかし、奮戦虚しく、お京の方の兜が梅の木枝に引っ掛かり、身動きが取れなくなったため、斬られてしまいました。現在、その伝説を伝える梅の木は天草市の延慶寺境内に「兜梅」として残され、熊本県の天然記念物に指定されています。

こうした伝説は、当時の日本側の史料では確認することはできませんが、ルイス・フロイスが著した『日本史』には、当時の状況が次のように記録されています。

「城主ドン・アンドレ（天草種元）とドン・ジョルジ（木山弾正）の妻女、およびその娘や息子の嫁たち、またその他の貴婦人たちは、すでに自分たちの夫や親族のあるものは傷つき疲労し、また他のものは戦死を遂げてしまい、もはや人間的に救われる道はなく、しかも武器を手にして対処するしかないことを知ると、三百人ばかりの婦人たちは集合し、自分たちが直面している切迫した危険を明白に認め、女性としての本来の弱体と臆病さを忘れ、勇敢な女侍のように全員が一丸となって戦局を盛り返し、自らの力を尽くして敵に抵抗しようと決意した。彼女たちはその目的で武装し、すでに疲労し負傷している息子や夫たちの前方に進み出て、死ぬまで戦い、あるいは敵から勝利をかち取ろうと健気にも覚悟した。（中略）彼女たちは倒された城壁の入口から敵が侵入して来るのを妨げようと勇猛果敢な戦いを演じ、敵に多大の損害を加え、また多くの戦闘において、その勇気によって勝利を収めた。」

こうした宣教師が残した記録から、天草合戦において女性たちも武装して戦場に出て、勇敢に戦っていたことが分かります。（大浪）

【質問】 龍造寺隆信の父と鍋島家の関係。

【回答】 龍造寺隆信の父・周家は、龍造寺氏庶流である水ヶ江龍造寺氏の出身で、叔父にあたる龍造寺家門の養子となりましたが、天文14年（1545）に主君・少弐氏に対する謀反の疑いをかけられ、多くの一門衆と共に粛清されたと言われています。その後、子の隆信が、水ヶ江龍造寺氏の当主となり、さらに本家（村中龍造寺氏）の家督も相続すると、次第に勢力を拡大させ、肥前を統一します。薩摩の島津氏と九州の覇権を争うまでに急成長しましたが、天正12年（1584）3月、島津・有馬氏の連合軍と争った沖田畷の戦い（現島原市）で戦死します。

龍造寺隆信の父・周家と鍋島家の関係は、もともと鍋島直茂の父・清房は、龍造寺家純（周家父）の息女である華溪を正室にして、主家と家臣の間で縁戚関係を結んでいました。清房と華溪との間に生まれたのが直茂です。つまり、龍造寺隆信と鍋島直茂は従兄弟の間柄でした。

しかし、天文17年に華溪が死去すると、弘治2年（1556）に隆信の母・慶闍尼が清房の後室になります。ここで、隆信と直茂は義兄弟となります。隆信存命中は、直茂は重臣として、また義兄弟として隆信を支えていましたが、隆信死後、龍造寺家臣団をまとめ上げ、難局を乗り切りました。こうした働きを評価した豊臣秀吉は、隆信の子で龍造寺家当主となった政家とは別に、直茂に対して所領を安堵し、国政を担うよう期待しました。豊臣秀吉は、大名家臣の中でも特に優秀な家臣をスカウトして、大名並みの処遇を与えることをしばしばおこなっていました。例えば、細川家重臣の松井康之、島津家重臣の伊集院忠棟などです。次第に国政の実権を掌握していった直茂は、朝鮮出兵でも龍造寺家臣団を率いて渡海するなど、大名としての地位と権力を確立していきました。（大浪）

【質問】 大名家においても、必ずしも長男が嫡子にならない例は多いように思うのですが、参考となる例をお願いします。

【回答】 兄弟が多いと、長男よりも弟が有能な場合もありましたので、家を生き残すため、必ずしも長男は嗣子として選ばれませんでした。

また、長男の立場が時の政治状況に合わない場合も、家を継ぐことができませんでした。細川忠興は逆賊明智光秀の娘・玉（ガラシャ）と離婚せず正室として守り抜きましたが、その父を見習った長男忠隆も関ヶ原の戦いの後に前田利家の娘千代との離婚を拒否したら、忠興から廃嫡されてしまいました。

実は、玉は関ヶ原の戦いで、西軍（織田家の淀君と豊臣秀頼）、東軍（織田家の江と徳川秀忠）、どちらが勝っても、明智の娘の自分がいる限り細川家に明るい未来はないと見定めました。それで、関ヶ原を潮時として「正室の戦死」を演出し、東軍西軍双方に大きな衝撃を与えました。

忠興としては、細川家が新しい時代に飛躍できるように玉自らが犠牲になったというのに、いざ徳川の時代が実現した際に長男が豊臣系の大大名前田家の娘を正室としていては、細川家の肩身の狭さは変わりません。それでは母・玉の犠牲が無駄になってしまいます。そんな長男は、今後の政界を読めないタイプだと失望したのでしょう。そこで徳川秀忠に人質に出していて、秀忠と親しくなり、秀忠周辺の人々に人脈を作っていた三男忠利を呼び戻して嗣子としました。これからは徳川ネットワークで生き抜くことを選んだのです。

ちなみに次男興秋は、長男が廃嫡されたので自分が嗣子になれると期待したところ、弟の忠利だったことに不満を持ちました。しかし、長幼の序より、忠利が徳川ネットワークを活用できることが細川家にとって有利だと、忠興は決断したのでした。

ですから、まだ政争が激しい時代には長幼の序より、人間関係や統率力を豊かに持つ子どもに次代を任せる傾向があったとみられます。

【質問】 戦国時代の家族の単位としての家をどう考えるべきなのか、江戸時代初期の一家は約10名の戸籍に記載してあったと考えますが、どうでしょうか？

【回答】 戦国時代の家族もいろいろありました。子どもは多く生まれましたが、貧しさゆえの間引きや堕胎や捨て子も多く、病気や事故で成長する前に死ぬ率も高かったため、一人の母が大人になるまで育てられる子どもは一般的には1～3名ほど。現代と同じような子どもの数でした。

側室が多いと、それぞれに子どもが生まれるので家の中の子ども的人数は増えます。しかし、正室や側室たち、母違いの子どもたち、再婚によって正室や側室になった女性の前夫の子どもたちまでもが広い屋敷で暮らしているとすると、「家族」とは何だろうかと考えさせられます。

また、江戸時代の宗門人別改め帳などを見ると、乳母や使用人も一家の一員に含められていることがあります。

あるいは百姓の家でも次男以下は親から農地を分けてもらえず、奉公などで家の外に出ない限り、一生長男の「厄介」として、その家の使用人のようになってしまっていました。もちろん嫁をもらったり子どもを育てることもできない立場です。自然、結婚できない娘たちも多かったです。筆者も昭和後期までの地方の家では、未婚のおじさんやおばさん、子どもにはよくわからない関係の親戚が、家族らしく食事を一緒にすることも、談笑することもなく、ただ黙々と召使いのように家事だけをしている姿があったことを記憶しています。かつては、家の中に大人が何人もいて、仕事を分担していたわけです。

一方で、現在の核家族で「家の中に大人の女性が一人しかいない」という状態は、主婦にかなりの負担が集中しているとも言えます。

【質問】 聞千代のお墓が熊本県長洲町にあるのは、何故でしょうか？

【回答】 関ヶ原の戦いで西軍に付いた聞千代の夫・立花宗茂は、領地の柳川を没収され、戦後一時期、加藤清正のもとに身を寄せます。この時、肥後の高瀬（現玉名市）に滞在していたと言われ、ほどなく家臣数人を引き連れて京都に上ったと言われています。妻の聞千代は、肥後に残り、玉名郡腹赤村（現長洲町）に移り住み、その地で没しました。聞千代が何故腹赤村に移り住んだのかは不明ですが、加藤清正は生活費として聞千代に兵糧などを送っています。（大浪）

【質問】 先生は、欧州の王室・貴族では、一般的に教育を受けなかったと言われましたが、テューダー朝のエリザベスだけではなく、オーストリア帝国ハプスブルグ家のマリア・テレジア、ロシア帝国ロマノフ家のエカチェリーナの統治の成功はどう評価し、解釈されていますか？

【回答】 西欧では10～12世紀、女子に教育は不要と考えられました。女性は心身ともにか弱いのて勉強に向いていないとされ、貴族の家庭の教育内容も、舞踏会で貴婦人らしく振舞えることでした。

例外は女子修道院で、女性だけで生活共同体を運営し信仰生活を行う以上、聖句や聖歌歌詞を読めなければいけませんし、写本をつくる必要もあったので、それに応じた教育が行われました。しかし、その教育結果を修道院外の世界に向けて発表したり、役にたてるものではありませんでした。またキリスト教の教育においても、女子は読み書きを駆使して思索・発表するより、口伝えや胸のうちに思いめぐらすことが重視されました。

王侯貴族や裕福な家庭で、家庭教師が兄弟を教えるのを横から聞くかたちで教育を得た幸運な少女たちもいましたが、女子教育は両親や社会が推奨することではなく、彼女たちがその教育を利用して自分の生きる道を切り開くことも困難でした。

そういう良家の娘はたいていの場合、幼い頃に女子修道院に預けられます。親が結婚を決めて引き取りに来るまで、外出すらできませんでした。そうやって娘たちの処女性を保証したのです。少女たちの世界は修道院の敷地内に限られ、そこで受ける教育は貴婦人教育（宮廷マナ

一や舞踏、音楽や絵画、刺繍など手仕事、簡単な読み方)でした。書き方を教わったかどうかは微妙で、手紙や文章は口述筆記で書いてもらったともいわれています。

そんな状況が変わったのはルネサンスです。イタリアの大学には女性の物理学教授もいました。ただ、やはりごく一部で、女子教育に理解を持つ例外的な環境の女性達だったといわれています。

イギリスでは16世紀半ばにトマス・モアが文芸復興を持ち込み、彼は自分の娘たちに積極的に高い教育をほどこしました。それにより「女子にも男子と同じ教育を」という機運がイギリスに起きました。

16世紀のエリザベス1世の少女時代の家庭教師は「教育の高さが本人の将来を決める。女性だからといって控えめになる必要はない」と考え、エリザベスに古典ラテン語や新約聖書原典(ギリシャ語)も教えました。トマス・モアのおかげで、エリザベスは同じように高い水準の教育を受けた女性たちに囲まれて育ち、エリザベス女王が率いる宮廷では女子教育が盛んになりました。

一方、エリザベスの姉・メアリは、「教育は必要だが、女性は心身ともに弱いのでから寡黙でいるように」という古い考え方の家庭教師に教育されてしまいました。社会全体を見れば、まだまだこのような考え方が常識だったわけです。

16世紀後半に来日した宣教師フロイスは「われら(西欧)においては、女性が文字を書く心得はあまり普及していない。日本の貴婦人においては、もしその心得がなければ格が下がるものとされる」と観察しました(松田毅一『フロイスの日本覚え書』中公新書)。

「日本の貴婦人たち」は、少女時代に修道院に閉じ込められることもなく、親元でのびのびと暮らし、『源氏物語』や『更級日記』など500年前の古典文学を読みこなし、求められればすぐ和歌を詠めば返歌も贈れました。そういう「日本の貴婦人」たちの教育レベルの高さは、ポルトガルの宮廷に仕えた経験のあるフロイスから見ても、驚嘆すべきものだったのでしょう。

細川忠興の正室玉(ガラシャ)はアルファベットまで習得し、ローマ字で活字印刷された日本語の信仰書を読むこともできました。

ヨーロッパ大陸のカトリック世界では、16世紀に創立されたイエズス会が教育を重視したおかげで、17世紀になってから女子教育熱がおこり、修道女たちが女子のための寄宿学校を作るようになりました。それでも、世の中の識字率は男性20%、女性10%でした。女子教育の内容も、結局世間の圧力により、読み書きよりも「手仕事と貴婦人教育」が重視されたといえます。商家の娘が学校に通うなら算数を習った方が役に立つのに、中世以来の「舞踏会での立ち居振る舞い、優雅な手仕事」＝「花嫁に箔をつける教育」が優先だったのです。

18世紀の啓蒙主義の時代になると、「子どもを教育するためには賢母であるべきだ」という理由で、男性知識人たちも女子教育の内容を学問的にすることを提唱しました。

王侯貴族の家庭では、「隣の国の王子様」と結婚する可能性がある以上、幼い頃から外国語教育がなされました。18世紀オーストリアのマリア・テレジアは結婚前にラテン語やフランス語を書けましたが、学問らしい学問は修められず、本人自身の政治的センスで統治したといえます。一方北ドイツの貴族の娘エカテリーナは、14歳でロシアの皇太子妃候補としてロシアに入国するまでに、すでに女性家庭教師からフランス語とともに合理的精神などを学んでいました。

18世紀は、家庭教師を雇える裕福な階層で親に教育への関心があれば、少女たちが高い教育を受けられるようになる時代でした。フランス革命の前後は、教養ある女性たちが主宰するサロンに名士や学者が集まって討論の花を咲かせました。ただ彼女たちは、教育を得た幸運を自分のものとして享受するのみ、世間一般の女子教育の水準を上げることにはあまり積極的ではなかったようです。

18世紀末から19世紀になって、ようやく女性たち自身が男子と同等の教育を受ける権利を求め、受けた教育を活用して自分の将来を切り開き、女子教育の普及に身を捧げるようになった次第です。

【参考文献】

G・デュビィ、M・ペロー監修『女の歴史』全10巻（藤原書店、2001年）。

ブリジット・ヒル『女性たちの18世紀 イギリスの場合』（みすず書房、1990年）。

石井美樹子「トマス・モアとイギリスの人文主義女子教育」（『神奈川大学人文学研究所報』52号）

【質問】 正室の役割は、スパイ活動ではないのでしょうか？また、婚姻は戦争防止というより勝利への戦略ではなかったのでしょうか？

【回答】 婚家の内情をスパイして実家に告げ、婚家を弱らせて実家の餌食にする。そういう結婚形態も、戦国時代ですから作戦としてありえました。妹や娘が嫁しているのに、その婿をどんどん殺したり滅ぼした無慈悲な大名も何人か思い当たりますね。

たとえば、天正15年の秀吉の九州統一の後、叛旗を翻した九州の国衆たちを鎮圧することは容易ではありませんでした。秀吉の激怒と叛乱者を早期絶滅させよという命令を受けたものの、黒田長政は中津・城井氏に手を焼き、戦術のひとつとして城井氏の娘と結婚して相手が油断したところを城井一族もろとも正室まで惨殺した、という伝承があります。これは「正常な政略結婚が破綻した」というより、城井氏殲滅が秀吉の既定方針だったため、長政は結婚を利用してなんとか命令を完遂したことになります。

ただ、大多数の結婚はもっと平和的共存・婚姻による親族拡張＝ネットワーク拡大を目指していたと考えられています。「娘婿を殺すのが常識」なら、大名は他氏と縁組みしなくなっていたはずです。

結婚の意味のひとつは「家族をつくる」ことでした。正室と大名の間に子どもが生まれる…、すると正室が願うその子の幸せな成長は、子の父親が健在で勢力維持していることが必須です。

政略結婚後に婚家と実家が戦争になった場合、一般的に、正室は事前に実家に返されるので命は保証されていました。しかし婚家の血を引く息子は、実家で殺されるのが常でした。ですから両家の間に後継ぎの男子が産まれると、両家の関係は厚くなるのが普通です。

正室は、男の子の命を守るためには両家に戦争をさせないように努力します。

正室実家の父は「婚家の次代は、婚家の子というより、我が孫だ」と考え、外祖父の影響力を使って自分の言うことを聞くように育つことを期待します。ある意味、婚家の乗っ取りです。

父である大名も、正室の実家と戦争をして正室と離婚した場合、正室の血をひく息子も手元に置けなくなるのが一般的です。父の家に残したとしても、生母が敵方ではその息子に居場所はなく、やむなく出家させることもありました。ですから戦争を避けますし、また、息子が何処を向いて育っているかにも目を光らせます。

このような血を交えた家族の情愛を活用し、相手の家を自分のものにする努力を重ね、大名たちは戦略的に勢力を拡大していました。歴史読本編集部編『戦国大名と政略結婚 全国有力大名家の血縁・血脈総覧』（新人物往来社、2012年）などの書籍もお薦めです。

【質問】 何故小西行長は西軍の責任者で、石田三成とともに斬首されなければならなかったのか？

【回答】 なぜ小西行長が「西軍の主要人物」として関ヶ原の戦場に居たかと言えば、それだけ「三成が信頼できる人材」が西軍に不足していたからか、行長が三成を見捨てきれなかったのか、家康政権での行長の将来図を描けなかったからでしょう。

筆者としても、多くの西軍大名が命どころか領地まで保全したにもかかわらず、小西行長が石田三成（西軍の実質指揮官）・安国寺恵瓊（西軍総大将毛利輝元の身代わり・この戦争の首謀者）と並んで斬首されなければいけなかったのか、それが知りたくて30年彷徨っているところです。だいたい伊吹山中糺賀部村で、行長がわが身を村人にゆだねた時「内府に連れて行き褒美を得よ」と言いましたが、その大物意識、自意識過剰じゃないですよね??

行長は、天正15年に九州で働くようになって以来、ずっと秀吉のために九州の貿易統制（日明貿易の権利を、日本側では秀吉だけが握り、秀吉が許可した者以外は貿易に参入できない体制）を目指して外交交渉を行っていました。文禄慶長の役という悲惨な戦争も、要はそれを明皇帝に認定させるための手段という側面を持っていました。

当時のアジア世界では、「国際的に通用する国王称号を使えると、対明貿易も独り占めできる」という感覚がありました。もし秀吉が明皇帝から日本国王の称号を認められれば、秀吉の船は対明貿易を許可されます。仮に徳川家康が明に船を送っても追い返されるのです。

それで文禄3年に行長は明に「秀吉を日本国王として認め、秀吉の重臣たちにも『日本国王の部下』としてそれなりの称号を与えてほしい」というリストを提出しました。ここで行長は、自分と西九州の貿易大名たち、そして石田三成・増田長盛ら奉行衆のために高い位の称号を求めました。その「日本国王の臣下」の称号で明に船を出せば、それなりの接待をされて取引もできるのです。その一方で行長は、徳川家康など国内の大物大名についてはかなり下のランクの称号で良いとし、隣領加藤清正などは名前すら載せてやりませんでした。

そんな原案はあまりに露骨なので、結局、当時の政権のパワーバランスに沿った称号が、文禄5年に明から各大名に与えられました。

行長が考えていたことは、秀吉亡き後の政権の守り方でした。

このままではナンバー2の実力を持つ徳川家康が天下を獲る。それを防ぐには、幼い秀頼を次代の「日本国王」として明皇帝にその権威を保障してもらい、有能な官僚石田三成らが行政を担当し、肥後宇土を中心とする西九州の海の勢力が活躍して、貿易立国として日本を豊かにする構想。これ以外に秀頼政権を維持する方法はないと思い詰めたのでしょう。

小西行長や石田三成らがそんな構想を企てていると知れば、家康も許しておけません。

だいたい、九州大名が貿易で小遣い稼ぎをしている限り、徳川幕府を開いたところで権威が保てません。豊臣秀頼を無力化し、日本中が徳川様の顔色だけを窺うようにしたいのに、小西行長とその周囲はいつも海外に目を向けています。「日本列島だけが世界じゃない」と肌身で知っている西日本大名たち。その中心が小西行長でした。

小西行長も、慶長4年には、亡き秀吉の政治秩序を守るよりも、新しい考え方をとる徳川体

制に入りそうな気配を見せましたが、結局慶長5年には、家康の下で西日本の貿易の自由は守られないと結論を出し、家康と戦う道を選びました。

それを行長は、「家康はキリシタンを禁止するから」という言い方で宣教師に伝えます。つまり行長は、貿易を仲介する外国人宣教師の国内定住、宣教師と親しくて海のかなたに友だちや取引先を持つような貿易商の居場所は今後なくなっていく、と見切ったわけです。行長は将来の「鎖国」を予想していたのでしょう。

また、行長がその貿易立国派の中心人物だと家康に思われていることも自覚していました。家康が天下を獲れば、行長は居場所がなくなります。

慶長5年10月1日、家康は京都六条河原で石田三成を斬ることにより豊臣政治の終焉を人々に見せつけました。同様に小西行長を斬ることで、権力に平伏せず、常に海外に目を見渡せる自由な思考を持つことは今後許されないことを、人々に思い知らせたのでしょう。

【参考文献】

佐島顕子「謎の海将小西行長」(『歴史群像』17号、学研)。同「文禄役講和の裏側」(山本博文・堀新・曾根勇二編『偽りの秀吉像を打ち壊す』柏書房、2013年)。米谷均「豊臣秀吉の『日本国王』冊封の意義」(山本博文・堀新・曾根勇二編『豊臣政権の正体』柏書房、2014年)。

【質問】 プロ野球解説者の故小西得郎氏が、小西行長の子孫という記述のある本を以前読んだことがあるのですが、これは史実に基づいたものなのでしょうか？

【回答】 故小西得郎氏がお父様からそう聞いたと本に書いておられるそうですね。

一般的に、御先祖と子孫の血縁関係というものは、なかなかわからないものです。かなりプライベートな部分にも属しますので、現代人の血縁関係でもしばしば微妙な問題が入り込む複雑な問題です。お家に数百年分の系図があったとしても、その根拠はどこにあるのかを調べると非常に判断が難しいです。本当かもしれませんし、違うかもしれません。

といって、そのお家の御先祖は本当ではないかもしれないと、他家の者が決めつけるのも失礼かと思います。

そのお家で代々言い伝えられてきたことでしたら、そういう言い伝えのあるお家として伺っておきたいと思います。